



田中 円香 (たなか まどか) 東京純心女子中 2年生

作品名：「モモ」の伝えたいこと

図 書：モモ

この物語は小さな少女モモが、時間の意味を見つける物語である。前々から読みたいと思っていた本だったため、自然とページを捲る手が進み、あっという間に読み切ってしまった。

私が本を読んで考えたことは、二つある。

一つは、この物語は現代社会を表しているということである。私が、コンビニに行ったときのことである。買う品物が決まり、レジに持っていったところ、ある男性が対応してくれた。レジ打ち、商品の袋詰めはテキパキとしていて早く終わった。しかし、私は彼がとても不愛想に感じ、その場が窮屈に感じた。後々考えてみたところ、彼には終始、笑顔が無いことが分かったのである。彼だけではない。最近見ているどの店員も仕事こそ速いものの、笑顔や元気がないのだ。偶に、愛想良く、笑って対応してくれる店員もいる。だが、今は圧倒的に「客より仕事」の人が増えてしまった。

この出来事は、モモの物語にも類似したものがある。床屋のフージー氏が時間どろぼうに時間を盗まれたシーンである。彼は盗まれてからというもの、時間を節約しよう、節約しようと考え、客に対して無愛想な人になってしまった。質より量ということだ。時間を貯めれば、お金が貰える。沢山の仕事をすれば、お金が入る。つまり、結局人はお金に目が眩むのである。私は、こんな行動を自分もしていると思うと怖くなった。なぜなら、人と人との交流が楽しくなくなってしまうからだ。そして、モモの親友、掃事屋のベッポもだ。彼は、「いつも次のことだけを考え、楽しく仕事をするのが大事だ」と、仕事の質を極める人であった。私は、この言葉を読んだとき、とてもいい考えたなと見習いたくなった。しかし、そんな彼も時間どろぼうに「モモを誘拐した」と騙され、身代金を貯めるために、せかせかと仕事をするようになった。自分も、大事な友人がもしも大変な状況であつたら、迷わずこうしたと思う。自分の考えを変えず、そして動揺せずに生きるということは、とてつもなく難しいと痛感した。

もう一つは、時間の重さだ。モモがマイスター・ホラの家で眠ってしまった間、外の世界では一年もの月日が流れていたという場面である。

彼女は一日しか経っていないと感じていたが、外の世界では沢山のことが起き

ていた。例えば、モモのもう一人の親友ジジは、有名語り手としてテレビや雑誌に引っ張りだこになった。さらに「子どもの家」という施設ができ、町中の子ども達がそこに入れられた、などである。このように、いつの間にかモモは時間に置いていかれたのである。この時、モモは今までにないほど失望したと思う。これが自分の身に起きたとしたら、私は辛過ぎてその場に倒れ込んでしまおう。自分のいない時代がいつの間にか終わっていたとしたら、生きている意味を無くしてしまいそうだ。人は、周りに合わせて生きている。少しでもずれたら、居場所が消える。居場所が無くなったにもかかわらず、もう一度友達に会いに行くモモの勇気に感動した。私が彼女であったら、ショックが大きくて何もできずにいただろう。この章は、本当に胸が苦しくなった。

そこから思ったことは、この世で一番怖いことは「孤独」ということであるということだ。時間どろぼう達が企てた、モモを独りきりにする作戦は、モモを精神的に追い込んだ。モモだけでなく、友達、大切に特別な親友でさえも…。彼女は、誰にも相手にされない、必要とされないということが一番の苦しみだったと考える。モモに関わった人々も「おかしい」と感じていたが、灰色の男達の圧力のせいでおかしいと思うこと自体がおかしいと思ひ込み始めたと思う。この時、灰色の男はルールであり「絶対的存在」であったのであろう。今の自分たちの生活も、知らず知らずのうちに灰色の男に侵食されているのかもしれないと思うと、血の気が引いた。それほど描写がリアルで、ぞっとしたのである。

私は、この物語を初めは、ただのハッピーエンドの夢物語だと思っていた。だが、本当は現代社会と結びついたリアリティのある物語であった。私は、こんな文学作品に初めて出会い、読んだかもしれない。また、この本のような小説を探し、読んでみたい。

このように、この本は決して綺麗事が書いてあるわけではない。「ファンタジーの中にある現実」といえるだろう。これからは、人と話すときは相手が快い気持ちになれるよう優しく接し、時間にあまり捕れないように生きていきたい。そして、モモのように友達を守れる人になりたい。